

## 僕の中の「ぼく」そして新しい「ボク」へ

秋田県能代市立能代第二中学校

三年 工藤 茂 哲

毎朝五時に起きて、新聞を読み、世の中の話題を頭に入れる。それから七時まで勉強をする。授業の復習、予習、塾の宿題、そして朝食を食べて学校へ。休み時間の十分の間にも復習、予習を欠かさない。午後七時に部活が終わり、帰宅して七時半に夕食。八時から十時まで勉強。学校のテストでは、いつも満点近くを取っている。……これが、僕の日常だ。……と言いたいところだが、これは僕の中の「ぼく」の日常である。つまり理想の自分だ。理想を現実に変えるために僕は何度も走りかけた。しかし、長続きせずに中途半端。「おし、やってやるか。」今までにどのくらいこの言葉を自分に言い聞かせただろう。中学生になって三年目。一カ月に一回のペースで、走り「かけ」ている。一度も走り続けたり走り抜けたりは、ない。そんな中、次々と目標を達成し、新たなステージへと駒を進める「ぼく」がいるのである。中学三年、受験生の僕を焦らせる、「ぼく」の存在。

僕の夢は、患者さんに寄り添う医師である。「医師」でなく「患者さんに寄り添う」がつくのは理由がある。医師というのは、寄り添って当然。だが僕は、僕が得意とするコミュニケーション力を軸に、患者さんにめっちゃ寄り添いたいのである。体が悪

い人は何かしら不安をもっている。それをできるだけ小さく、減らせることができれば……。これを現実するために「ぼく」と同じ道、それ以上の道を走らなければならない。頭では分かっている。やらなければいけないことがある。夢の実現のためには、「走り抜かなければいけない。」

僕が「医師」の夢をもつきっかけは、何より祖父の存在にある。祖父は七十七歳。引退してのんびり過ごしていい歳なのに、今でもたくさん患者を毎日診て、寄り添っている。そう、現役の医師である。祖父は知識が豊富で、特になぞなぞが大好きだ。お盆や正月に親戚が集まったときには、なぞなぞ大会を開くほどだ。祖父はみんなを笑顔にする力もっているのだ。僕も人を笑わせるのが好きで、祖父ゆずりのセンスをもっているつもりだが、祖父みたいに使えないのはまだまだだ。

僕は十五歳。「医師」になるのはずっと先のこともかもしれないが、大学進学へつながる「高校受験」が数カ月後にやってくる。十年後には現場にも出るだろう。そんな先のことじゃない。そのための勉強は、「今」から始まっているのだ。

ちよつと苦手な国語、英語力を高めるべく、四月から新聞を読むことにした。朝は時間がなく、せめて社説だけでも読んでいた。社説は毎日違った話題を短く取り上げていて、短時間でもサクッと読める。事実、筆者の考え、主張の三つに注目して読むのである。その甲斐あって、「僕」的には少し成長してきたと思っているが、「ぼく」にはそんなの当たり前。むしろプラスアルファで予習、復習もこなしている。多少の焦りは感じるが、「ぼく」の存在が、僕にとつてのいい刺激になっている。

ちなみに僕の兄は頭が良い。僕が分からない問題もスラスラ解いてしまう。近くの大先輩として、勉強の仕方を聞くこともできる。しかし、しょせん人

の真似ではそれを超えられない。真似ではなく、いつかは自分流を見つけてなければと思う。今は、どんな勉強をすべきか、やり方は自分に合っているのか：様々な悩みの嵐である。嵐が去るのが受験前では間に合わない。すぐに遠くへ飛ばしてやらなければ。それがまさに今なのだと思う。

今まで一度も走り抜けたことがない僕の、一つ目の試練は、「中三の夏、嵐を吹き飛ばせ!!」なのだろう。いや、なのだろうではない。もう道は見えた。「嵐」を吹き飛ばすのが僕の目標。計画としては、夏休みの序盤で吹き飛ばし、後半は晴れ間の中で自分を追い込む。やがては、大きな花を咲かせてやる。改めて、僕の夢は「医師」、「患者さんに寄り添う医師」である。実現させることは、僕の望みであり、「ぼく」の使命である。

朝、まずは新聞を読む。そう、「ぼく」の日常へと着実に近づいている。夏休みには、「ぼく」を超えてやる。この夏が進化の時。精神的にも厳しい時期になるが、「僕」と「ぼく」には、覚悟ができていく。人を助ける人になるには、人並みの努力では物足りない。祖父や兄のように、学習面でも人間としての面でも「僕」はまだまだ成長できるはずだ。この夏は、必ず走り抜ける。「僕」と「ぼく」のフルマラソン。三十二日間、走り抜けた先にある新しい「ボク」に、早く会ってみたい。人生は、一本の道でつながっている。今の努力は、必ず未来へ生きてくる。僕は走り続ける。